

◆11番（たかおか知子君）＝登壇＝会派、あしやしみんのこえの、たかおか知子です。

質問通告に従いまして、1つ目の項目、学校教育における子どもの未来への投資の重要性について御質問いたします。

当局の行財政改革では、少子高齢化に歯止めをかけるためと言いつつ、不安定な財政難の見込みばかりを強調し、コスト削減を口にされることも多く、市民へのそのような伝え方が子どもを減らす社会に向かわせている一つの原因でもあると感じています。

そこで、教育長にお伺いします。児童が減り、単学級になっても、学校として運営できるような仕組みを取り入れ、また、地域のバランスの取れた地区防災計画を行うために必要な公共施設として建物を存続していくお考えはあるのでしょうか。

特に小学校は防災面でも地域の避難所ともなる大事な施設です。ところが、現在ではその防災地区の考え方も中学校区で分ける考え方に向かおうとしています。中学校が近くにない住民にとっては、どんどん防災地区の規模が広がり、避難所が遠くなるありさまです。考え方を柔軟に、市内の児童数を調整するならば、校区変更、自由校区の許可や学校選択制を検討するなど、これまでの学校の在り方を時代の変化とともに変えていかなければなりません。

反対に、児童数が多い学校の事情として、南芦屋浜地区のように地区内に学校がないため、南芦屋浜から潮見小学校まで橋を渡り、遠距離通学を余儀なくされている児童も増えております。この通学路については次の2項目めの質問でも取り上げておりますが、気候変動による登下校中の新たな問題も出てきました。また、地震や災害時においても、場所の離れた潮見小学校が2次避難所の指定場所ではなく、南芦屋浜地区の中で体育館や高台の避難所施設を必要としています。南芦屋浜地区の学校の新設または分校の建設を望む声が浮上しています。

そこで、教育長にお尋ねします。平成27年の3月、突然の南芦屋浜の小学校建設白紙撤回は、必要性や計画についても議会で議論されることなく、2か月間という短期間で中止という判断を下されましたが、南芦屋浜は現在、芦屋の中でも人口増加率が高く、また、避難場所としての活用を鑑みると、なぜこの地域に小学校が建設されなかったのかが今でも疑問でなりません。また、このまま南芦屋浜内に小学校のインフラ整備がされないままで、住民の不安の解決に十分に対応していけると言えるのでしょうか。

市長にお尋ねします。この先もいずれ子どもが減るだろうという見込みだけをもって、小学校は無駄な経費であると判断されるということであれば、今後、学校教育に係る設備予算として、どんな理由なら使ってもよいということになるのでしょうか。また、子育て環境を整えるという投資がまちの発展や人口の増加につながり、積極的に歳入の拡大を目指すことにつながっていくとは考えられませんか。これからの日本を支える子どもの将来に対して、学校教育は子どもの未来への投資だと考えていますが、どのようなところに比重を置かれて予算をつけていくのか、お聞かせください。

2つ目の項目は、教育現場における熱中症対策についてです。

当市を取り巻く学校事情は地域によって異なりますが、特に体力を消耗しやすい登下校について言えば、学校が遠くなるほど通学中に炎天下にさらされる時間は長くなり、最近ではゲリラ豪雨や大雨警報など、通学途中の強風や雷雨による危険性まで高まりました。子どもの安全を心配する保護者からは、登下校で子どもたちが受けている負担を解消するための手だてはどうなっているのかという声も聞くようになりました。

そこで、お尋ねします。熱中症の危険性についてどの程度危機感を持ち、また、熱中症の事故を起こさないためにどのような対策をこれまで講じてきたのか、今後取り入れていきたい新たな対策があるのであれば、お聞かせください。

3項目め、幼稚園・保育園、小学校等で災害発生時の連絡の取扱いについてお尋ねします。

当市として、警報・特別警報発令時の連絡の取扱いについて、休園・休校の目安や警報解除までの待機の状況

はどのような取決めになっているのでしょうか。警報時の市の認識と学校側の判断、保護者との連携について、うまく円滑に連絡が取れているのか、お考えをお聞かせください。

壇上からの質問は以上です。

○副議長（福井利道君） 答弁を求めます。

いとう市長。

◎市長（いとうまい君） =登壇=たかおか知子議員の御質問にお答えいたします。

初めに、将来を担う子どもたちのためには、人口減少や急激な高齢化など、激しい社会変化に適応し、社会保障関係経費、公共施設の老朽化対策経費などの増加にも対応しつつ、10年先、20年先、さらなる未来を見据えた施策を実施することが重要であると考えております。

そのためには、本市の質の高い行政サービスを持続的に提供できるよう、常に政策目的の実現に資する事業の優先順位を精査した上で、魅力あるまちづくりと子育て、教育環境の充実等に取り組む必要があると考えております。

次に、認定こども園及び保育所等における警報・特別警報発令時の連絡の取扱いは、警報等発令時の統一基準により、午前7時の時点で、気象警報及び特別警報が発令されている場合は、認定こども園幼稚園部は休園となり、認定こども園保育所部及び保育所等は、特別警報が発令されている場合のみ、休園となることから、保護者の皆様には、入所時のしおりに加え、年度当初に警報等発令時の対応を周知しております。また、教育・保育時間中に警報等が発令された場合は、メール等により対応をお知らせしております。

そのほかの御質問につきましては、教育長からお答えをいたします。

○副議長（福井利道君） 福岡教育長。

◎教育長（福岡憲助君） =登壇=たかおか知子議員の御質問にお答えいたします。

まず最初に、小学校の配置につきましては、現時点において統廃合の検討は行っておりませんが、今後の児童数の推移の動向について注視してまいりたいと思っております。

次に、児童数の違いによる教育への影響につきましては、学校施設の整備や教職員配置など市内8小学校において同じ水準での教育環境を提供しており、小学校間での差異はないものと考えております。

続きまして、小学校区につきましては、従来より一部地域において調整区域を設けており、可能な限り柔軟に対応しているところでございます。

また、小学校区の見直しを行うことになれば、おのずと中学校区にも連動するほか、地域コミュニティ活動などの市民生活への影響も考えられることから、校区の決定に際しては、緻密な将来推計と一定の安定性が必要であると考えておりますので、今後、精道中学校の建て替えが完了し、市内全ての中学校で給食が開始された後の児童生徒数の推移などをよく見極めた上で考えてまいりたいと思います。

続きまして、教育現場における熱中症対策につきましては、熱中症は、高温多湿な環境下で体が適応できないことにより、体温調整機能が働かなくなるなどして、目まい、けいれん等の症状を起こす病気のことであり、ひどいときには命を落とす危険な病気であることは認識しております。

予防策としては、環境省、熱中症環境保健マニュアルを参考に取り組んでいます。

具体例としては、暑さ指数測定装置を各校に配置するとともに、体育や部活動の実施に当たっては、スポットクーラーやサーキュレーターを活用しながら対策を講じ、安全配慮をしております。また、ミストシャワーやウオータークーラーを設置することで身体温度を下げる場の工夫も行っております。小学校6年生と中学校2年、3年生の保健の授業では、熱中症に関わる予防や応急手当について学習をしております。

通学の距離につきましては、文部科学省が、平成27年1月に示した公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引によれば、公立小学校においては、おおむね4キロメートル以内と示されており、奥池地区を除く市内においてこの条件を満たしていると考えております。

以上でございます。

○副議長（福井利道君） たかおか議員。

◆11番（たかおか知子君） 御答弁ありがとうございます。

先に熱中症のことから御質問させていただきます。いろいろマニュアルを基に認識されてるということで、ウォーターサーバーのお話が出てきたかと思うんですが、一つ、潮見小学校でこんなお話がございます。子どもが帰ってきた際、お母さんが言いました。「水筒空になってるやん」。そして、お母さんは子どもに対して、「帰る前に学校に入れてこないと、途中で飲めないやん」と言いました。すると子どもは、「ウォーターサーバーが遠いから入れられへん」と言います。それならばとお母さんは考えました。潮見小学校のPTAの方に相談して、ベルマークを集めてウォーターサーバーを購入してもらおう。実現しました。ところが、ウォーターサーバーは思っていた場所ではなく、元の場所での入替えだったということだったんですが、これはなぜそういうことになったんでしょうか。

○副議長（福井利道君） 本間管理部長。

◎教育委員会管理部長（本間慶一君） ウォーターサーバーの件でございますが、PTAの寄附により配置されたということで、学校と相談しながら適正な場所に配置されたというふうに聞いております。

以上でございます。

○副議長（福井利道君） たかおか議員。

◆11番（たかおか知子君） 今、適正な場所とおっしゃったんですが、こんなところも、保護者の希望をかなえるには、結局インフラ整備が必要になって工事費がかかるとか、そういうお話で、その思う場所にはつけられなかったということでしょうか。

○副議長（福井利道君） 井岡学校教育部長。

◎学校教育部長（井岡祥一君） これは、全学校においてウォーターサーバー、ウォータークーラーは設置されております。その中で、日頃から子どもたちの多くが活用できる場所というのを相談しながら設置しているところです。ですから、例えば体育の授業から帰ってきたときにみんなが飲める。それから、休み時間から帰ってきたらみんなが飲めるというようなところで、数が限られているウォータークーラーですので、一番いいところはどこかということで設置をしているという状況です。

以上です。

○副議長（福井利道君） たかおか議員。

◆11番（たかおか知子君） ちょっとしたことなんですけどね、お母さんにしたら、少しでも登下校の門の近くにウォーターサーバーがあれば子どもは補充してくれるんじゃないかという思いもあってこれを集められた

ということでした。

次に、今、熱中症対策で話題になっていることをちょっと取り上げたいんですけれども、他市です。茨城県のつくばみらい市では、市内全小中学校14校に自動販売機を1校当たり1台から3台設置、ペットボトル入り冷水を無料配布、1人1本を8月24日から9月末まで。事業費1,515万円。

このように、子どもの命と健康を守るために、当市ならそこまで予算をかけることができますでしょうか。それとも、対策は万全だから、会議もしてますし、もう予算をかけなくても大丈夫な範囲なので、こういった取組は検討なさらないのか、そのあたりちょっとお伺いしたいです。

○副議長（福井利道君） 井岡学校教育部長。

◎学校教育部長（井岡祥一君） 先ほどのウオータークーラーとつながるかと思うんですけれども、子どもたちの今の現状を見ていますと、やはり水を飲む回数が増えております。そうなったときに、ウオータークーラーのところに行って、子どもたちの水筒の中に自分たちで補給していると。補給と言ったら言い方が変ですけども、追加していると。そういうような状況で今対応しております。ですから、水道も引いていただいておりますので、そういうのも活用しながら水分補給という形で、子どもたちの水筒を活用しながらできているというふうに考えております。

以上です。

○副議長（福井利道君） たかおか議員。

◆11番（たかおか知子君） できていればいいということなんでしょうか。今、コロナとか衛生面のこととかも言われてますし、こういった取組をされてる、ああそういうところもあるんだとはならないんでしょうか。

もう一つ、話題となっていますが、岐阜県本巣市というところですね。ノーランドセル通学。ランドセルの代わりにリュックサックなどで学校に通う取組で、ノーランドセル登校ということで荷物も軽くなり、児童にも評判がいいということです。

なぜこんなことをしたかという、ランドセルに教科書などを入れると本当に重くて、4キロから6キロぐらいの重さになります。長距離だと特に体への負担も大きくて、背中が熱気が籠もりやすい、蒸れやすいということで、取り入れられてます。教科書は持ち歩かずに常に自宅に置いて、授業はどうするのかという、ここがすごいんですけれども、教科書が手元になくても、教員は教室の電子黒板にデジタル教科書を映した授業、ここまで考えられてるんですね。児童は最低限必要なものを持って学校に行くだけ。荷物が1キロ程度に減ったという児童もいるということです。

当市はこういう熱中症対策、ランドセルについてはどうお考えですか。

○副議長（福井利道君） 井岡学校教育部長。

◎学校教育部長（井岡祥一君） 議員のおっしゃられているのは岐阜県本巣市の8小学校のことだと思いますが、岐阜新聞のほうにも書かれてるんですけども、9月末まで継続し、10月からランドセルに戻すことを決めたというふうに書かれております。芦屋市の状況におきますと、現在も、子どもたちのランドセルで登校している、またはランドセル以外で登校している割合についてはちょっと分からないんですけれども、子どもたちが全員ランドセルで登校しているという状況ではございません。恐らく家庭でも相談されてると思うんですけども、子どもたちが、リュックサックで登校しているという現実もあります。

それから、荷物のことなんですけれども、それぞれ中学校も小学校も全てにおいて、各学校でできるだけ荷物

を減らそうということで、学校によっても違うんですけども、学年で統一して、そして持ち帰るもの、置いておくものというのを決めて、荷物を軽減して、子どもたちが登下校しているという状況になっております。

以上です。

○副議長（福井利道君） たかおか議員。

◆11番（たかおか知子君） 呼びかけてくださっていたりもしますが、保護者の判断に任せることが多いことなのかなと思うんですけども、なぜこういう学校で一貫性を持ってやることに意味があるかということ、子どもって、あなただけこれやっていいよと言われても、ほかの子と違うことってやりたがらないんですよね。置き勉にしてもそうなんですけど、先生からいくらいいいよって言われても、ほかの子がやってなかったらやらないような状況だったりするわけです。

私がこの2つをなぜ取り上げたかということ、もう決断力の速さ、導入の速さに驚きました。そこをお伝えしたかったんです。そうやって速やかに、本当に子どものためにこれをやってみようというチャレンジ精神を私は感じたので、こういった姿勢も一つあるということを知っていただきたいと思います。

なぜかという、先ほど教育長もおっしゃってましたけど、新型コロナウイルスよりもたくさん死者が出る熱中症、とても危険な病気なんです。痛ましい後遺症を残すこともあったり、学校側を訴えた裁判事例もあります。後悔し切れない事態が起こってからでは遅い。そこを理解して、今後も検討をお願いいたします。

次、またちょっと他市の話になるんですけども、兵庫県神戸市北区に長尾小学校というのがありますが、こちらは新興住宅地で児童が多い。以前は長尾町というところにあったんですけども、2007年に上津台に移設してます。そちらの児童のほうが上回ったということで、代わりに長尾町から通っている生徒にはスクールバスを出しているという学校です。

さらに、この学校なんですけれども、近隣に神戸市立大沢小学校というのがありまして、こちらは少人数学校なんですけれども、中学校の校舎が同じで、幼稚園と児童館も一緒の敷地内にある小学校です。こちらの小学校と長尾小学校、どちらを選択してもいいということらしいんですね。私の知り合いなんかは、兄弟で性格に合わせて、この子は児童が多いほうがいい、下の子は性格的に少ないほうがいいって学校を選んで通わせているそうです。しっかりとバスも運行させて、通学バス代替りの交通手段もあるということです。

そこで、お伺いします。近隣市では人口流入に合わせて、学校移設や、保護者が子どものニーズに合わせて選べる校区の見直し、分校等、対処をしていますが、なぜ当市はそういった取組をなかなか検討されないのでしょうか。

○副議長（福井利道君） 本間管理部長。

◎教育委員会管理部長（本間慶一君） 校区の見直しの件でございますが、神戸市の事例、確認はさせていただいておるんですが、本市の場合、狭い市域に8つの小学校がございます。その関係で通学距離も比較的短くなっております。一方で、校区を見直すとなりましたら、利用の児童生徒、それから保護者の皆様に非常な影響がありますので、見直す場合は審議会等開いて、慎重に対応させていただいているところでございます。

以上でございます。

○副議長（福井利道君） たかおか議員。

◆11番（たかおか知子君） 今後も見直されるんですね。それでは、画面を切替えてください。（画面切り替わらず）

芦屋市の小学校区を見ていきます。今現在はこうなっております。

◆11番（たかおか知子君） 画面を御覧ください。（資料をモニターに映す）芦屋市の小学校は今このようになっています。ちょっと潮見小学校区の通学区域を見ていきたいと思います。

南芦屋浜地区は新興住宅地であることから、小学校の建設が予定されていまして。平成27年2月の小学校建設に関わる説明会では、推計で平成31年4月、南芦屋浜地区の児童が約600人に達する見込みのときに、今年4月に学校ができる予定でした。土地で言うと、このときは約2万4,000平米、総建設費が70億円と騒がれたんですけども、この試算は減額なしの積算の最大値の試算数字でした。建設費は利息と合わせて39億円、土地の価格は利息と合わせて31億円という説明だったんですけども、実際は県企業庁との交渉で、現在、土地は17億円で取得しているということです。

学校の敷地の話が出てきたんですけども、現在の各小学校と見比べていきます。敷地面積、先ほどの2万4,000平米は、これで見ると、最大の土地ということが分かります。南芦屋浜の児童数が約600人になれば学校建てましょうということなんですけれども、一番多いところで精道小学校622人。南芦屋浜地区の児童が600人なので、潮見地区と合わせると、これまた一番多い児童数で学校を建てましょうということだったということですね。

ここで、御質問いたします。現在の潮見小学校の児童数、南芦屋浜から通う子どもの児童数、各4町のそれぞれの児童数は幾らですか。教えてください。（資料の提示終了）

○副議長（福井利道君） 本間管理部長。

◎教育委員会管理部長（本間慶一君） 9月1日現在で申し上げます。潮見小学校の全児童が642名で、南芦屋浜地区4町から通う児童なんですけど、陽光町が161名、海洋町が67名、南浜町が81名、涼風町が131名、合計で440名になってございます。

以上です。

○副議長（福井利道君） たかおか議員。

◆11番（たかおか知子君） 現在、平成32年の児童数をお伺いしましたら、440人ということなんです。ここで、平成27年度の御説明のときの推計と比べてみたいと思います。平成32年現在で577人なんです。でも、現在は440人ということで少なくなっています。（資料をモニターに映す）

3校合わせて比べてみたいんですけども、平成52年、20年後には3校並んで単学級、平均30名クラスと同等の数ですね。たしか当時教育長は、単学級になっても統廃合するつもりはないという御説明だったんですけども、ならば、児童が減るから学校を建てないという考えではなく、もう少し初めに規模を縮小した小学校、現実には440人ですので、それを見込んで検討できたはずですよ。

もう一つ、学校建設により得られる効果として、地域のコミュニティの核や避難所といったことを考えたときに、当時の予定地ではなく、南芦屋浜地区の中央付近にJゾーンと呼ばれるマルハチ横がありますよね。そこに計画を見直すこともできたはず、いや、今からでもできます。どうしてこのように総建築費を過大数値で見立てている段階で計画を白紙にして、もっと必要性や将来性を議論しなかったのでしょうか。そもそも計画に問題があったのに、なぜ白紙撤回後、計画自体を見直すことすらされなかったのでしょうか。お答えください。（資料の提示終了）

○副議長（福井利道君） 福岡教育長。

◎教育長（福岡憲助君） 私自身がこの小学校のことについてずっと携わってきましたので、まず申し上げておきます。この南芦屋浜地区の広さと、それから浜風小学校と潮見小学校を合わせた地域の広さ、ほぼ一緒です。そういうロケーションの中で、教育委員会としたら、そもそもまちができたときに学校ができるべきものと考えていたわけなんです。そのときに、平成7年ぐらいにまちがだんだんできてきたんですけどね、そういうときから初めてこのまちについては、阪神・淡路大震災があり、また、子どもたちが徐々に増えていったときに――長々となってしまうので割愛しますが、結論的に言ったら、まず最初、まちができ始めたとき、ライフラインと同時に小学校建設。それが、次に、阪神・淡路の影響、また、芦屋市内では震災によってたくさんの学校が被害を受けましたので、まずある学校の整備。そして、この地域にはまだ子どもたちが少なかったという経緯で、次になったと。そして、今回あそこはミズノのスポーツの施設になっていましたから、そこが更新の時期に合わせて、県のほうから芦屋はどうするんだということで、結論としては最終的に、その時点ではもう潮見地区の学校は、子どもが減ってきていました。ですので、潮見小学校だけでも、南芦屋浜の子どもを合わせても十分に入る余地のある地域でございました。そういう中において、やはり子どもたちの学習環境はどうあるべきか。国においては学校の標準のパターンを示しておりましたので、そのパターンの中で芦屋市としてどうやったらいいのか、そして、通学距離についても答弁申し上げましたけども、国としては4キロ、中学校では6キロという基準を出してまして、その中において、私も何度もあそこを歩きまして、あればいいと。ですので、平成26年8月18日、このときに教育委員会としては、そもそも潮見小学校で事足りるんだけど、その配置と、そして御指摘のあった通学距離、様々な観点から考えたら、学校があっていいのではないかということで、でも、やはりそれは多大な予算を使うことですので、やっぱり市長部局のほうに検討をお願いし、結果的に12月に市長のほうから、適切だと思うんだけど、やはりもう少し判断を、市民の意見を聞きましょうと。市民の意見を聞く中で、そこでは賛成意見もありました。また、強い反対意見もありました。当地域においても反対される方がたくさんありました。そういう中において、教育委員会としては、決定的に予算権のある市長のほうから建てないという御判断をいただきましたので、ここのメリット、デメリットよりも、執行機関として市長の判断というのは非常に重たいということで、そこで最終的に、教育委員会としてはこの小学校建設を断念したというのが経緯でございます。

ですので、やはり私たちは、学校というのは子どもの学習の場であると。防災の拠点であったり地域コミュニティの場であるというのはそれに付随してくるのですが、やはり子どもの学習環境を充実させるというのが教育委員会の本来の姿勢だと思っております。

以上です。

○副議長（福井利道君） 当局が発言しますと画面切り替わりますので、再度資料提示の場合は、意思表示お願いします。

たかおか議員。

◆11番（たかおか知子君） 御答弁、長いことお話しいただいたんですけども、私には納得も共感も一つもできませんでした。南芦屋浜の避難所になるはずだった一つの可能性すら奪った責任は大きいとすら思いました。

ここで、もう一つお見せしたいものがあります。「南芦屋浜のまちをそだてる会」のお母さん方に協力していただいて、共同でアンケートを実施しました。画面を御覧ください。（資料をモニターに映す）

この会は、南芦屋浜の生活や暮らしについて日頃自分が感じている問題点や周りでよく聞こえる声から、もっとほかの住民の方の声を聞きたい、知りたいという思いで、南芦屋浜に住むお母さんたちで最近立ち上がりました。この画面は、ネットに長けている保護者なのでネットアンケートをやってみました。期間は9月7日から8日の2日間、対象は南芦屋浜から潮見小学校区に通う4町の保護者様です。登校班や自治会、子ども会の方に御

協力いただき、友人のみを通じて対象に配信していただきました。

こちらにアクセス数が出てるんですけども、アクセス数に対して回答数は82。こちらは一度入力した端末からは再度入力できず、1回限りとなっております、チェックした結果、同じ内容が何度も入力されるということはないそうです。こちらスマホからの回答が一番多かったんですけども、それをちょっと見ていきたいと思います。

あなたの町名。やはり関心の高い涼風町が一番多いようです。お子さんの学年。やっぱり関心のあるのは1年生が多いですね。お子さん何人いらっしゃいますか。やはり兄弟がたくさんいるお子さんをお持ちの方が多いので、今回のアンケートも2人以上のお子さんに対して1人の保護者の方がアンケートをしていることを考えると、回答数82よりは児童数の多いデータを頂けたかなと思っております。小学校までの距離、やっぱり「どちらとも言えない」、「不満」が多いですね。一番上が「不満」になっております。私これびっくりしたんですけど、お子さんは1人で下校したことがありますか。帰りですね。行きは集団登校があるんですけど、帰りに1人で帰る子は、なかなか、半分以上いるんだなということを知りました。お子さんを車で送迎したことがありますか、これはかなり多いですね。やっぱり心配なことがたくさんあるんでしょうか。周りにそのとき車はどんな感じですかというようなアンケートです。荷物の重さも聞いてみました。やはり距離のある分ちょっと重いということで、「不満」のほうがちっと多いのかなと思います。置き勉のことも聞いてみました。かなり支持層が多いとか、やっぱり気になってる方が多いのかなと思います。登下校中、お子さんが熱中症になりかけた、もしくはなったことがありますか。これ意外と少ないんですけどね、後でこのアンケートのコメント、回答数35の中を読みますと、何かどうも、熱中症とかが心配で迎えに行かれた方が多いようなので、それで今回は免れたようなところもあるのかなと思いました。集団登校についてなんですけれども、18人が「不満」という回答の中で一番多かったのが、人とのペースが合わないということで、合わせるほうも合わされるほうもとっても負担ということが出ておりました。送迎したことがある人によると、30人が回答しています中で、迎えに行く時間がやっぱり集中するので、駐車場が満車になっている。途中の道で拾ったりすることが多いようです。通学中の危険についてなんですけど、34人回答しています。やっぱり気になるのは、陸橋であゆみ橋を渡るとき、自転車とぶつかる、落ちそうになる、歩道橋でつまづいた、不審者を見かけた。こういったことが危険だと感じているみたいです。長距離の徒歩であることで、余計に重さを負担と感じているのが、先ほども言っていた置き勉がいいという意見だったんですけども、なくてもいいという意見もありまして、それはやっぱり宿題できないことが気になるとか、そういったことが多かったようです。35人が回答、ここですね。避難所や距離のことを考えて、小学校建設を白紙撤回した理由がまだよく納得できない。この意見も多かったです。

一方、こちらは未就学児のお子さん。これすごいことなんですよね、アクセス数186。未就学児のお子さんについては、よかったらこれやってねというような感じで回したんですけど、反響がかなりありまして、これは関心が高いのかなと私は思っています。中でもやはり多いのが涼風町ですね、一番多い。距離が遠いほどやっぱり気になっている方が多いというデータも出ております。お子さんがいらっしゃいますか。これも2人以上の方が多くて、現在、潮見小学校に通っていますかでは、半分以上がいないということなんで、これから学校に新たに通おうとしている方が結構アンケートに答えてくれてるんだなということが分かります。学校までの距離、これはやはり「不安」ですね。多いです、77.4%。熱中症、ここはかなり多いです。91.9%の方が心配。62人が回答しています。

未就学児のお母さんは、小学校に対して今一番関心を持ってきているということが私自身思ったんですけども、やはりこのデータで分かったことは、子どもの年齢が低いときに教育に対する意識が高い。高学年になるにつれて薄れていく。自分の子どもに直接関係なくなってくると、やっぱりそういう問題は、人は今の環境に慣れるというか、これぐらいよいかということでシフトされていくのかなということを思います。要は、教育のテーマについて市民が触れ合うのが短いということなんですよね。画面を切り替えてください。(資料の提示終了)

先ほど涼風町は、学校についての関心が高いと今の人口流動見ていきます。平成27年3月31日、この時点

で小学校に通ってるお子さん60人なんですよ。この60人が、これから先どんどん増えていきます。今現在193人、未就学児がいて、442人の世帯、2倍に増えてます。この人たちが学校が必要やからって、この60人が反対している人たちにその声を届けることってできますか。先ほど大原議員の答弁の中でもおっしゃいましたね。いずれ芦屋に帰ってきてほしい。環境をよくしていきたいんですよ。

それだったら、ここでお尋ねします。小学校に対する意識レベルで言うと、低学年に集中するということはいろんな分析ができます。小学校の存在や質、内容を低学年の親は非常に重視しています。移住するにしてもそういったものを求めるし、それが全市的にできていないのであれば、人口はどんどん減ります。教育委員会ではそういうことを考えなくてある意味当然だと思います。それは市として教育環境を整えていく立場だからです。全体の意見を基にやっていますから、市が若い、働き世代の流入を必要としているのであれば、その意識統一を教育委員会としていかなければいけないのではないのでしょうか。

この涼風町、今現在増えている方たち、少数派という理由でこの意見を聞かずして教育という施策を決めるのは、ましてや絶対少数に議員がそれを言い出したら、誰がそのまちの教育を支えていくんですか。このデータは当たり前ですか。

質問ないんですけれども、続けます。画面戻してください。アンケートを御協力いただきありがとうございました。

これを見て私はこう思いました。学校教員の負担――本来の生徒への学習指導によるものでない対外活動、時間的、精神的にも余裕のない中で日々苦悩しているのが小中学校の先生の実態ではないのでしょうか。涼風町まで子どもを送っていた先生が帰る途中で熱中症になったという話も聞いています。PTAの負担――保護者の意見を吸い上げ、子どもたちのために日々活動して、PTA、保護者さんの力に頼り切って、助けられていることはいっぱいありませんか。保護者にしても、お迎えに行ってもいいですよって言われても周りに気が引けて、心配で迎えに行ったら駐車場は満車で、周りに駐停車したらモラルがなくなって非難を受けます。

この会のある方はこう言っています。私は子どもが3人います。仮に新しく小学校ができたとしても、上の子は潮見小学校を卒業させてあげたいと思う。私たちが思うのは、今ではなく、まちの将来を見据えてほしい。避難所があり、生活利便性でそろっておくべきものがある、その一つの島、まちとしてしっかりと成り立ってほしいという気持ちから私は動いていますと。

これまでここに挙げられた方たち、与えられた環境の中で努力してこられた方々に支えられて、危険な目にさらされながら我慢している子どもに甘えて、自分たちはただ現状も知りもしないで、お金がないとぼやいて、市民を不安にさせて、我慢させているだけだと私には映っています。

まとめますが、目先の利益にとらわれて大局を見失うことなく、長期的視点で市政に取り組んでほしいと強く要望します。国の動きを待ち、そこに合わせていく芦屋体質はもう変えていき、自ら自治体独自の対応をしてください。

今の南芦屋浜の状況をつくり出したのは、先のことを深く考えず、ただただ反対した当時の議員の責任でもあります。だから、学校教育に関する予算の必要性についても、もっと真剣に議会に訴えかけてきてほしいんです、必要なんですって。私も一人の議員として、後に議会の判断が後世に大きく影響を及ぼすことを自覚して、真摯に受け止めながら、これからの議会運営を行ってまいります。